

プロローグ 小説投稿は出会いのはじまり

「よし！ これでいいか」

一人きりの部屋に、達成感に満ちた声が響く。

慣れた手つきで画面上のボタンをクリックし、最も有名な情報発信ツール、ツブヤイターとの連携も終わらせた。

数秒後、タイムラインに『投稿しました【R18】爆乳ロリサキュバスのお愉しみタイム』と表示された。

ときおり、インターネットを使って小説を投稿している。タイトルと表記からわかる通り、男性が責められる大人向けのものだ。
半年前に活動し始めて、これで四本目――

人気があるわけではないし、そこそこの知名度すら有していない。そう数字が示している。僕の文章に魅力がないから人が集まらないのか、知られていないだけなのか、またはわからないが。

それでも続いているのは、ただ単純に書くことが好きだから。子どもの頃から、頭

に思い描いた物語を文字にする癖があった。

努力の証をじつと眺めていると、通知が一つ二つと増えていく。覗いてみると、投稿作品に反応してくれていた。

感謝の気持ちが溢れんばかりに生まれ、心が震えるほど幸せになる。

落ち着いてくると、パソコンを点けていたこともあり、そのままネットサーフィンに突入。気になる動画を観たり、自分に合いそうな作品を探してみたり……そんな感じでページを開いては閉じてを繰り返す。

数十分後、ツブライターに戻ってみると、通知がまた一つ増えていた。

その内容にも目を通してみる——

『七草氏、久々のサキュバスもの存分に楽しませてもらったでござる。やはり爆乳ロリサキュバスはボクつ娘が一番でござるな。それでスク水とは恐れ入ったなり。ボクつ娘爆乳ロリサキュバスのスク水着衣パイズリ、最高すぎてめっちゃ濃いの出た！ 次も楽しみにしてるでござるよ』

七草氏というのは、僕のことだ。はつめななくさ初芽七草という名で執筆活動をしている。実名じやないのは、言わなくてもわかるだろう。

それで、リプライを送ってきた人は、細川フトオさん。本名や顔まではわからないが、いつも親しくしてもらっている。たぶん……いや、絶対に男性。啖きからそう言できる。

以前、学校行きたくない。女の子様のおもちゃになれるのなら行くけど……みたいなことを呟いていた。そのときに、授業についていけませんよと返信したら、予想外の言葉が返ってきた。

『授業教える側だよ』

彼が職務を全うできているのか、とてつもなく不安になる。とはいっても、こういう人に限ってオンオフの切り替えがすさまじく、凄腕教師の可能性もあるからなあ。現実というのは、恐ろしくて面白いものだ。

ネット友達で教師であろう彼は、初めて感想を送ってくれた読者もある。処女作からの付き合いで、今回もコメントを書いてくれた。引いてしまう感じの内容と口調だが、とてもありがたく思っている。読むだけでなく、使つてまでくれるなんて。

『ありがとうございます。属性を混ぜ過ぎたかなと心配でしたが、楽しんでいただけて何よりです。そうですよね、爆乳ロリサキュバスとボクつ娘の相性は最高ですよね。

また細川さんとサキュバス談話したいです』

返信を終え、ベッドの上に寝転ぶことにした。疲れがたまっているのか、このまま横になつていれば、すぐに夢の中に旅立つてしまいそうだ。

それでも、今寝るのはさすがにまずい。昼寝にしては遅すぎるし、ガチで寝るには早すぎる。

今の時刻は午後六時。母親が夕食の準備をしながら、部活をしている子どもの帰宅を待つてゐる時間帯。父親は帰つてゐる……方が珍しいだろう。とはいっても、今日は休日。ずっと家にいるし、父だって仕事を休んでいる。

もう少ししたら、晩ご飯だ。どんな料理になるんだろう。カレーライス、それとも肉じゃがかな。

そんなことを考えていると――

降りてきて。そう大きな声で呼ばれた。生まれてきてからずっと耳にしている母の声だ。

何の用事かは知らないけど、降りてこいと言われたら降りるしかない。渋々ではなく、期待しながら階段を下りていく。

外食に行こうだつて。

母の愛情と苦労がこもつた手料理も好きだが、外食は外食で良いものがある。その提案を快く受け入れ、家族全員で近くのファミレスへと向かうことにした。どれほど美味しい物を食べるかより、どれだけ楽しく食べるかを重視している僕にとつて、ファミレスはうつてつけなのだ。

「はああ！？ なんだよこれ……」

心も体も満腹になつた僕を待つていたのは、驚愕の事態。驚きのあまり、それを表す言葉が口から出てしまつていて。

ある点を除き、いつもと同じツブヤイター。通知欄がとんでもないことになつていたのだ。四リツイートぐらいされれば好調と思っていた投稿作品が、二十リツイートもされていた。

一体なぜ？ 誰のおかげ？ 僕のような人がどうして？

恩人たちを辿り、一つの結論にたどり着く。

「サキュの宮先生……」

同人サークル『サキュバスパレス』主催者、サキュの宮先生が、僕の作品に興味を示してくれていた。

めちゃシコなイラストを描くサキュの宮先生は、活動し始めてまだ二年ほどしか経っていないのに、特定の界隈で大変な人気を博している。

名前の通り、サキュバスのをメインにしていて、男がことごとく負かされる内容ばかりだ。それが、屈強な雄であっても未成熟であっても構いなし。

一週間ほど前に販売したCG集が、もう五百を越える売り上げを叩き出した。もちろん購入済みで、今でも夜のローテーションに入っている。

個人的神絵師が、僕の小説を広めてくれたおかげで、普段よりも多くの人の目に留まつたのだろう。

さらに驚くべきことに、サキュの宮先生にフォローされていた。予想外の出来事に、震える手でリフォローをする。そして、覚悟を決めリプレイ――

『ありがとうございます。サキュの宮先生のイラストはいつも見てています。新作も購入しました。あの尻尾ホールが最高で、ラストの差分とセリフがめちゃシコで何度も

使っています』

『送り終えてから、いきなりは失礼だったかな、ああ言えばよかつたかなと後悔してしまう。細川さんのような慣れた相手だと、こんなこと思わないのになあ。』

『その数分後――

『フォローと感想ありがとうございます。そのシーンは特に力を込めたので、嬉しい限りです。七草先生の新作も読ませていただきました。おっぱい愛が伝わりました。サキュバスの家畜になってしまった後が気になります。これから他の作品も読んでみます』

尊敬している人から感想をいただけて、かつてないほどの高揚感に包まれる。一つ一つのコメントが創作の支え。この言葉が、全身に身に染みわたっていく。幸せを噛みしめつつ、再度返信する。

『これからも先生の作品を購入します。次回作も楽しみにしています。今年もコミフェにいると聞いているので、今から新刊が楽しみです。それと、いつものようにDL販売はありますか』

『コミフェというのは、コミックフェスティバルの略称で、年に二回ある特別な三日

間のことだ。全年齢から成年向け、意外なものまであり、好きなものをみんなで共有しあう場所らしい。行つたことないせいで、詳しいことはわかつていないけど。サキュの宮先生はこれまで何度も参加していて、今年もサークルとして参加すると呟いていた。

『新刊はまだはつきりと決まっていなくて。それでも、いつものスタイルは変わりません。もちろんD L販売も予定していますので安心してください。七草先生の新作も楽しみにしています。お互いにがんばりましょう』

『僕もサキュの宮先生の新刊楽しみにしています。いつも応援しています』

こうして、尊敬している作家先生との会話は幕を閉じた。これからも、迷惑に思われない程度に話してみたいな。

幸福の熱が冷めないまま、夢の中へと旅立てる……わけがなかつた。情欲の熱も同時に沸き上がつていたのだから。

何もかも忘れて、知能指数をとんでもないほどに下げて、一時の快樂を味わいたい。先生の作品に、自身のたまりきつた欲望を吐き出したくなつてくる。

寝る前に運動をすると、眠りやすくなるのは本当のようで、瞬く間に意識を手放した。